

美術の窓 (104)

ウィーン大学古典考古学と大和文華館
ー館長退任にあたってー

大和文華館館長 水田 徹

ウィーン大学本館右翼、本部事務局に通じる大階段の右脇下に聳える高さ3メートルの大扉、その楯石に刻まれた研究室名「古典古代史・考古学・碑文学」、それが私の一生の仕事となった。

東京オリンピックの年の秋、その7代目正教授ヘドヴィッヒ・ケンナーの講義「古代ギリシア美術史」を最初に聞いたときの感動を、私は今も忘れることができない。

ウィーン到着間もなく、まだおどおどしながら講義室に入ると広い教場は学生で溢れていた。先生の声がよく聞き取れるよう教卓直前の席について待つことしばし、ざわめきが一時止まったと思うや、靴音を轟かせ学生が総起立するではないか。その中をやや俯き加減に教卓に向う老婦人教授。そしていきなり出席を取るでもなく、いささか冗談を飛ばすこともなく一正にいきなりギリシア美術史の本論を堂々と講じはじめた。

その博識と精緻な作風分析、緻密な作品解釈は私を驚嘆させ、その圧倒的迫力は遂に5年もの長きにわたり私をウィーンに留めることとなった。それはさておき、最初の授業の終了間際の出来事も私を感嘆させた。

45分の授業時間は瞬刻に過ぎ、教授の最後の言葉をノートし終えるや否や、学生たちはいっせいに机を叩き、いま終わったばかりの講義に賛辞を表すではないか。教授は穏やかな笑顔でこれに応え、学生は一段と強く机を打つ。その間ほんの数秒であったろうか。だがそこに私は、教師と学生の間に学問愛が醸成されてゆく姿を見た気がした。

古代ギリシア史のシャッハマイア

ーの授業は異色だった。例えばペリクレスの葬送演説に話が及ぶ日、教場に入った途端シャッハマイアはペリクレスになり切る。学生をアテネ市民に見立て腕を振り上げ、民会の演壇に立つ姿さながらに講義を進める。別の日、今日の教授は少し元気が無いなと思いきや、やっこのことで教壇に登った態で息を弾ませ、かすれ声で途切れ途切れに、アレクサンダー大王が熱病に犯され最期を遂げる段を講じるのである。

そのシャッハマイアとケンナーの信頼関係は傍目にもうらやむものであった。彼の著名な青銅器文明論やペリクレス論には資料として考古遺品がふんだんに用いられ、しかもその遺物観察に血が通っているのは、まさにこの歴史学者と考古学者の幸運な出会いによるものであり、そこにウィーン考古学の伝統と魅力が見て取れたのである。

ベッツのラテン碑文購読は詳細を極め、かつその教育効果は絶大であった。一字一句はもとより、ちょっとした文法、語法を捉えて全ローマ史に論が及ぶ。その厳しい学風は学生の躰にまで及び、研究室で自習中に開いたままの本をつい数冊も重ねていようものなら、本が傷むと烈火のごとき叱咤が学生の頭上に飛んでくる。新入生はうろたえ反撥するが、やがてその叱咤の声に学問を愛する心を目覚めさせてゆくのであった。

フェッターズが肩襟つきのシャツに探検帽の出で立ちでエフェソスの発掘現場に立つ姿は、古き良き時代の大考古学者の威厳が備わっていた。彼の現場主義の執念はついにエフェソスにポンペイに匹敵する良質な壁画を発見させ、民間企

業を説いて集めた資金で現地に復元した壮大なローマ建築は、エフェソスをトルコ第一の観光地に仕立て上げた。長年発掘に携わった学者の背には、数千年の歴史の重みがずっしりと掛かっているように見える。エフェソスの発掘現場の夕日に映えるフェッターズの後ろ姿を、私は今もそう思い鮮やかに脳に浮かべることが出来る。

そのフェッターズもケンナーも、あのシャッハマイアもベッツも疾に亡くなられ、彼らの個室にはそれぞれ次世代、次々世代の学者が陣取っている。しかし研究室の一角には先輩教授たちのための読書机が今なお然るべく整えられ、机上の鉢植えには毎朝水が注がれる。老教授たちがまたいつでも勉強に來られるようにと。そのひたむきさ、その心遣い。そこに私はウィーン古典考古学の伝統の重み、学問への情熱を改めて強く感じるのである。

それから30年、縁あって吉川逸治先代館長の跡を継いで大和文華館に赴任し9年間、私が第一に心掛けたのは、このウィーンで学んだ学問への情熱、学問愛を基本に美術館を運営し、展覧会を企画することであった。

世間様にも、美術館仲間の間でも、大和文華館は研究センターの美術館、あるいは研究も行う美術館という評価が定着している。その意味では私は誠に恵まれた環境で仕事をさせていただいたということになる。

しかし私の考える美術史研究と美術館運営の関係は、決して主従の関係でも、並列関係でもない。目指したのは作品の調査・研究を基盤に展覧会を立ち上げる、いわば研究を糧として展覧会なる花を咲かせることによって、入館される皆様に美術をより身近に、より深く観賞していただくことであった。

そのことは美術館運営にとっただけでなく、美術史という学問の発展にとっても必要なことと私は考える。学問とは単に象牙の塔に知識を集積するだけではなく、その成果を広く社会に開示することによって、学問

自体の深化もまた果たされる。

大和文華館の運営に即して言えば、展覧会をご覧頂き、毎週の列品解説あるいは展覧会毎の日曜講座を皆様に聞いていただくことによって、展覧会を企画した学芸員の美術史学は更に深まり、次回の展覧会は一層充実する、というわけである。

美術館のお客様と大学の学生ないし研究者とでは対応の仕方が違うのではないかというご意見に、私は組みしな。やや論旨が外れるが最近こんなことがあった。

大和文華館の展示解説板は語彙、語法が難しく小学生には通じないのではないかというご指摘。もっともかと思ひ恒例のあやめ池小学校の皆さんの団体見学の際、付き添って來られた先生方に、もっと噛み砕いた解説板を用意すべきかお尋ねしたところ、いやこのままにしておいて下さいとのお答え。難しいが故に生徒はより積極的に見学に取り組み、ひいては作品を一層深く観賞するという趣旨であった。

ましてや友の会会員の皆様はもとより日頃入館頂く方々は、知識も人生経験も豊富であられ、特に近年はご自分なりに下準備をされた上で作品に対峙されるお姿も多々お見受けする。そうした方々との対話、そうした皆様から頂く反応が、どうして学問、ひいては展覧会の深化に役立たぬといえようか。

来る2010年、我が大和文華館は創立50周年を迎える。これを機に本館をリニューアルすることとなり、その基本計画もほぼ整った。むろん外観、竹の中庭を中心とした等身大の展示空間に一切変更は加えない。

しかし私自身は在任期間も長くなかった。リニューアル・オープンはずいぶん新館長に取り仕切って頂くべく、この3月末を以て退任することとした。新館長のもと大和文華館が次なる50年の第一歩を立派に踏み出されるよう祈りつつ、そして最後になったが、友の会会員の皆様の長きにわたるご声援、ご鞭撻に深謝しつつ、退任のご挨拶をいたしたい。

(平成20年3月記)

季刊 美のたより No.162

平成20年4月4日

発行 大和文華館